

オンライン講演会第1回「映画『パラサイト』と韓国社会のリアル」

(要旨、日韓文化交流基金 NEWS95 号に掲載)

2020 年 11 月 20 日

河昇彬氏（韓国外国語大学校日本研究所研究委員）

1. 『パラサイト』の受賞と韓国社会

アカデミー作品賞のプレゼンターを務めた女優ジェーン・フォンダの口から『パラサイト』の名が出た瞬間、韓国は歓喜に包まれた。2020 年は韓国映画 100 周年を迎える記念の年だったのだが、それを記念するかのようにアカデミー初の外国映画として見事に作品賞を受賞した。それも、作品賞だけではなく、監督賞・脚本賞・国際長編映画賞までの四部門で受賞した。作品性を重視するカンヌと興行を重視するアカデミーの両方の受賞は、世界的にも注目を浴びつつある韓国映画の新たな可能性を示したとも言える。

では、この映画にはどんな魅力があるのだろうか。それを理解するためには、監督であるポン・ジュノの世界観を理解する必要がある。ポン・ジュノはデビュー作である『吠える犬は噛まない』から、『殺人の追憶』『グエムルー漢江の怪物』『母なる証明』『スノーピアサー』、そして『オクジャ』に至るまで、韓国社会にまたがるさまざまな問題に対峙する個人や家族を描いた作品を撮り続けている。中でもポン監督が注目している社会問題の核心は「格差」であり、ほとんどの映画で格差が定着している社会に焦点を当てている。

2. 映画が描く「家族」の群像

この映画の中では3組の家族が登場し、いろいろな撮影技法や視点で彼らの中での格差を表している。

まずは、ソン・ガンホ扮するギテク一家。住んでいるのも半地下で、収入も一定でなく、ギテクの職業も何度も変わっている。ただ、最初からそんな状況ではなかった様子も描かれていて、段々と下流生活に追い込まれていった様子が伺える。

もう一方は、明らかな上流社会であるパク社長一家。家も高級住宅で、高級車を2台も乗りこなし、生活にも仕事にも余裕を感じられる。使用人に対してもおおらかで彼自身が定めた「線」さえ越えなければほとんどのことは大目に見てくれるほどの良い人であった。

最後は、パク社長の家の使用人であるムングァンの家族である。彼女の場合、見た目は上流社会に溶け込んでいるように見える。しかし、彼女の実態は…というのは映画を見てない人のためにも割愛しておこう。ポン監督本人が「まるでジェットコースターに乗ったような感覚」と言った映画のクライマックスまでの緊張感はこのことから始まるので、まだ映画を見てない方は是非とも見てほしい。

3. 「チャパグリ」で象徴される衝突

ここに登場する家族は、普段であれば交わることはなく、互いに張られた「線」の中で生きていくはずだった。しかし、いつの間にかその線を超える人が現れる。時には階段を通じ

てその上下の線を越えていき、また、影からひなたに出ることでその生活の線を越えてしまう。最後には意図しなかった「匂い」までもがその線を越えていってしまう。

そして中盤以降では、この映画で話題となった「韓牛入りチャパグリ」のように3つの家族が家という空間の中で混ざってしまう。この映画でチャパグリは高級食材＝パク社長一家、種類の違う2つの袋麺はギテク一家とムングァン一家を象徴していて、中盤以降からこの家族たちが交わって大変なことになることを暗示している。

映画は下流社会にいる人々が上流社会に寄生していき、時には彼らを恨み、妬み、一方で感謝とリスペクトをしながら下流社会同士の争いを描く。この姿はポン監督が見る韓国社会であり、世界でも共感を得た格差問題の現状であった。



再開発が始まった現場（2枚とも著者撮影）

4. 韓国社会のリアル

実際の韓国では1997年に通貨危機が起き、経済状況が急激に変わった。この時に職失った人々はギテクのように家族を養うためにいろいろな職を転々とし始める。そして、失敗を重ねて半地下や屋根上部屋などに流れて行くようになったのである。

この半地下や屋根上部屋は社会経験の浅い若者や大学生たちの住処だったのだが、いつの間にか下流社会の人々が集まり住む空間となる。韓国戦争時代から都市には人々が集まり住み始めた「月の町(달동네=タルトンネ)」と呼ばれた地域があったが、その地域の再開発が始まると住んでいた人々も半地下や屋根上部屋に移り住んだ。しかし、今度はその地域でも再開発が始まってしまう。行き場をなくした下流社会では、そこから追い出されまいと、生き残りをかけて下流社会同士が衝突している。上下階級の衝突ではなく、階層内での衝突が起きているのである。

5. おわりに

この現象は韓国だけの問題ではない。格差問題を抱える国々で同じような現象は起きている。この映画が世界的に注目されヒットしたのも、この「格差」という問題に対し世界各国が共感したからであると思われる。映画は面白くその世界を描き出したが、現実はより「リアル」なものであることも訴えているのかも知れない。

【プロフィール】

河昇彬（ハ・スンビン）

政治学者。韓国・釜山出身。神戸大学大学院法学研究科で博士号を取得。専門分野は電子政府化や日韓比較など。現在は韓国外国語大学校日本研究所研究委員、日韓同時通訳士を務める。